

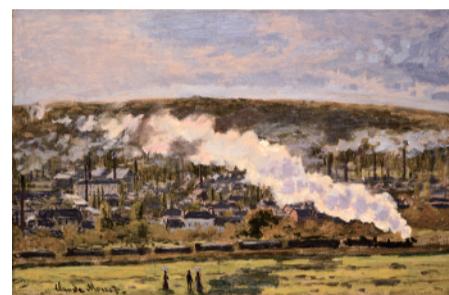
ZOCALO 2015 10▶11

2015年11月14日(土)~2016年1月31日(日)

企画展

旅 | 素晴らしき多様性にめぐりあうために

旅について、みなさんは何を夢見ますか。海外を周遊したい人もいれば、もつと身近な場所を訪ね歩きたい人もいるでしょう。現実になりつつある宇宙旅行に憧れる人もいれば、椅子に座つてSF映画や空想小説の冒險を主人公の気分で楽しみたい人もいるでしょう。旅への想いは人それぞれですが、旅に共通しているのは、日常生活から離れて、普段とは異なる体験をし、未知のものに驚き、多様な世界にふれることではないでしょうか。



左上:
カナレット(ジョヴァンニ・アントニオ・カナル)
『ヴェネツィア、サンマルコ広場』1732-33年頃
油彩・カンヴァス、東京富士美術館蔵
© 東京富士美術館イメージーカイブ/DNPPartcom

右上:
ヴァロキエ
『モロッコのアラブ人、メッカへの巡礼者』
19世紀後半、アルビュメン・プリント、個人蔵

右下:
クロード・モネ『貨物列車』1872年
油彩・カンヴァス、ボーラ美術館蔵

ところで、旅を通して世界の多様性を本当に味わうためには、旅人は何を心得たらよいでしょうか。この点について思索を深めたのが、二〇世紀初頭にフランスの海軍で船医を務めながら、異国での経験をもとに文章や詩を綴ったヴィクトル・セガレンです。セガレンは、野生を求めてポリネシアの島にいきついたゴーギャンが世を去つたわずか三ヶ月後、この画家の最期の家をヒヴァ・オア島に訪れます。ゴーギャンが遺した作品、資料、草稿に感銘を受けたセガレンは、異文化をどのように受け止め、語るべきなのか、考えを巡らしていきます。一九〇七年には『記憶なき人々』を出版し、西洋文化の侵入により固有性が脅かされていったポリネシアの文化を、西洋人ではなく原住民のマオリ人の視点から記します。そこには異国が他者なのではなく、旅人(西洋)こそ他者であるという、反転する見方が表れているのです。その後も、中国をはじめ世界各地を訪れたセガレンは、旅先で出会うエグザイクなものの、多様なるものを、旅人の一方的な視線や解釈を超えていかに経験しうるか、模索し続けました。そして、旅人の知識や想像と、旅先の現実とが常に衝突し、フィードバックしあう先にこそ、世界の眞の素晴らしき多様性が開けてくると、旅の真髄を捉えていきます。現代の私たちの旅の多くが、ガイドブックの情報に従つて現地をただ確認するだけなのに對し、セガレンの旅の姿は実に本質的であつたといえるでしょう。

今回の展覧会は、普遍的なテーマである旅について、主に西洋近代の絵画、写真、版画、挿絵本などから読み解いていきます。世界の素晴らしき多様性に巡りあうために、みなさんを旅と芸術の物語へと誘います。(I.H.)

MOMASコレクションⅢ 2015.10.10 [Sat] - 2016.1.17 [Sun]

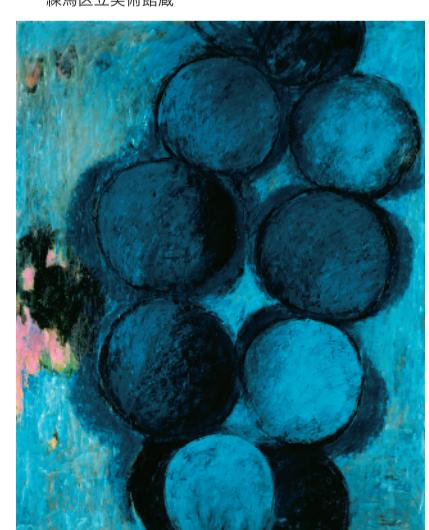
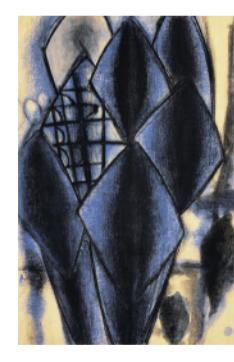
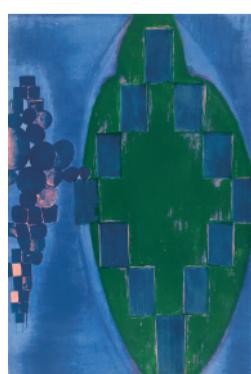
MOMASコレクション第3期では、昨年9月に64歳で亡くなった辰野登恵子(1950-2014)の作品を特集展示で紹介します。長野県岡谷市出身の辰野は東京藝術大学の油絵専攻に学び、70年代にグリッドやストライプをモチーフにしたシルクスクリーン作品で注目を集めます。間もなく油彩画に回帰すると、80年代以降、豊かな色彩で有機的形象を描く独自の表現を追求し、抽象絵画の新たな可能性を示し高い評価を得ました。40年にわたる辰野の画業は、日本の現代絵画を語るうえで欠くことのできない重要なものです。

今回の特集展示は、90年代初めに制作された油彩と大型のリトグラフ作品を中心構成します。巨大なカンヴァスいっぱいにぼこぼこと連なるいくつもの丸いかたちや、四角形がつながった大きな菱形は、辰野作品の代表的なモチーフです。例えば、油彩でのこの特徴的な丸いかたちの変遷をたどってみると、はじめはフラットな円形だったものが次第に立体感や重量感を備えたかたちへと展開し、92年に制作された今回の展示作品では、圧倒的なボリュームを持って絵画空間に存在しています。これらのモチーフは、長辺が2メートルを超えるカンヴァスに、細い筆のタッチを繰り返し積み重ねて描かれます。あらたに加えたひとつのタッチが画面に及ぼす変化を注意深く見極めながら、飽くことなく手を加え、何度も描きなおすことで徐々に生み出されるかたちが、絵画でしか実現しえない複雑で濃密な空間を創りだしているのです。

一方、こうしたモチーフの展開を共有しながら並行して制作されたリトグラフ作品には、油彩画の塗り重ねられた筆触の重苦しさから解放されたような軽やかさがあります。しかし、注意深く目を向ければ、版の重なりにより輪郭線と陰影にずれが生じていたり、丸みを帯びた量塊と思えたものがふと空洞のような凹みに見えたりと、単に同じかたちの連なりに見えたものが、実は曖昧かつ両義的であることに気づかれます。この味わい深い空間性に気づくとき、一目見たときに受けるシンプルでおおらかな印象は鮮やかに裏切られるのです。油彩と版画という異なる手段を往還することで、より深みを増し展開していった辰野登恵子の作品世界を堪能いただければと思います。

さて、辰野が本格的な制作を開始する直前の60年代末から70年代初めは、美術や芸術のあり方に厳しい目が向けられ、その仕組みが根底から問いただされた時代でした。もはや絵画の時代ではないという意識が主流であった中でキャリアをスタートさせ、それでもなお絵画を描くことを選んだ辰野は、80年前後を境にグリッドやストライプといったミニマルなイメージから、ストレートに「絵を描く」ことに回帰します。

今回、その過渡期にあたる時代に制作された未発表のシルクスクリーン作品を特別出品します。塗り重ね削ぎ落とし、さらに塗り重ねるという手わざの痕跡を感じさせる領域と、それまでの無機的なストライプがせめぎ合う作品群は、辰野の作品理解の新たな一助となるものと期待しています。(I.O.)



アタナシウス・キルヒヤー『シナ図説』1667年刊、書籍町田市立国際版画美術館蔵
蓮弁の上にのる仏教の図像を描いている。

- 1:《MAY-25-91》1991年 リトグラフ、紙
- 2:《NOV-23-1993》1993年 エッチング、アクアチント、紙
- 3:《MAY-21-91》1991年 リトグラフ、紙
- 4:《UNTITLED 92-8》1992年 油彩、カンヴァス
練馬区立美術館蔵

ZOCALO = ソカロは
メキシコの都市の広
場を意味するスペイ
ン語。埼玉県立近代
美術館はアートを通
して交流する市民の
広場をめざしています。